

京都府新総合資料館（仮称）公募型設計競技の結果について

平成23年10月14日
京都府文化環境総務課

京都府新総合資料館（仮称）の基本・実施設計については、106者から応募が
ありましたが、この度、下記のとおり最優秀作品が特定されましたのでお知らせ
します。

いずれも意欲溢れる清新な提案を寄せていただいたことに、心から感謝いたします。

記

1. 施設概要

- 名 称：京都府新総合資料館（仮称）
- 場 所：京都市左京区下鴨半木町
- 構 造：法規及び眺望景観を考慮した構造・高さとする。
- 規 模：24,000㎡程度

2. 施設の特性

賀茂川をはじめ豊かな自然景観を有し、府立大学、府立植物園、京都コンサートホールなど周辺の地域特性を活かした、地域と交流し、京都の情報発信に寄与する、世界に誇る文化・環境・学術の拠点となる施設

3. 審査経過

- 公募開始 平成23年5月20日（金）
- 第1次審査応募書類の提出期限 平成23年6月30日（木）
- 第1次審査 平成23年7月13日（水）
- 第2次審査応募書類の提出期限 平成23年9月7日（水）
- 公開ヒアリング及び第2次審査 平成23年9月20日（火）
- 審査結果の公表 平成23年9月30日（金）

4. 審査委員会委員（五十音順、敬称略）

審査委員長	川崎 清	京都大学名誉教授、建築家
審査委員	井口 和起	京都府特別参与
	出江 寛	建築家
	竹山 聖	京都大学准教授、建築家
	藤本 壮介	建築家
	山内 修一	京都府副知事
	山本 理顕	建築家
	渡辺 信一郎	京都府立大学学長

5. 審査結果

審査は、2段階選抜方式で行い、第1次は公募により概要設計提案を募集し、慎重審査を行い、本業務に対する理解度、的確性、創造性等を評価し、まず106案の中で優れた入選作品19案を選出し、さらにその中から、より優れた提案5案を入賞とし、第2次の審査対象としてより深く検討した案の提出を求めることとしました。

入賞者は、次のとおりです。(五十音順、敬称略)

- ・飯田 善彦 (いいだ よしひこ)
- ・金子 敬輔 (かねこ けいすけ)
- ・武井 誠 (たけい まこと)
- ・平田 晃久 (ひらた あきひさ)
- ・丸山 剛史 (まるやま たけし)

第1次選抜入賞の上記5者の中から創造性、機能性、経済性、実現性において総合的に評価して、最優秀者1点、次点の優秀者を1点選ぶこととしました。審査では公開ヒアリングを行った上で、各々の案の長所短所を比較検討し、次のとおり最優秀者、優秀者の2点を選び、最優秀者は本業務の基本・実施設計者として特定し、次点者は予備候補者としました。

○最優秀者 飯田 善彦

○優秀者 平田 晃久

6. 審査委員会講評

(1) 全体講評

第1次選抜入賞者の作品はいずれも力作で、卓越した創造性、合理的な機能性、均衡ある経済性、実現可能性など、丹念に検討を重ねる中、甲乙つけがたい内容で、審査委員の伯仲した議論を巻き起こした。その結果、創造性では優劣つけがたいものの、機能性と実現可能性の点で僅かな差が優劣を分けた。

(2) 個別講評

<最優秀者>

飯田 善彦 案

京都の町のたたずまいを良く読み込み、それに連携するグリッドを平面の基本形とし、低層・分節化し細い鉄骨の骨組みと大小の傾斜屋根を組み合わせた大屋根で、繊細で柔らかい表情を持った外観にまとめ上げている。屋根は単なる形の上の提案を超えて、環境装置として利用し、現代的に意味のある建築として成立させた。平面計画も、複合化した機能をゾーンで分節化して整理し、中庭を配して、閉鎖的でなく明るい空間にしている。さらに今後起こりうる機能の進化などに柔軟に対応できる空間構成となっている。ラチス構造が繁雑に見えることや若干ガラスが多く、視覚上、音響上の懸念が指摘されたが、容易に改良される程度のものである。

今後の京都市的現代建築の一つの方向性を示したものとして高い評価を得た。

<優秀者>

平田 晃久 案

BOX状の空間を構造エレメントとして積み上げ、内側にできるドーム状のボイドとBOX内部の空間を巧みに組み合わせ、大小様々な空間を用意した。特に一階に無柱の開架閲覧エリアを配し、利用しやすい総合空間とするなど優れた平面計画になっている。BOXとBOXの間にできる間隙にガラスのトップライトを組み込み、マッサと光の交錯したユニークな空間をつくり、さらに屋上部に植栽豊かな庭園を用意し、日本建築特有の庭と空間の関係に見立て、京都市空間の提案とした。

以上特化した優れた提案をしながらも、構造上の強い拘束が、平面機能の柔軟な対応を妨げる疑問を持たれたこと、上階に多人数を収容する公開ゼミ室を置き避難上の問題があることなどについて、審査委員の懸念を払拭できなかった。

<入賞者> (五十音順)

金子 敬輔 案

明解で解りやすい平面計画、全体をシンプルにまとめた大きな空間構成に好感を持たれたが、二階に資料館、大学図書館の主要開架閲覧室を配置した結果、社会的弱者への配慮不足が懸念され、また、京都学センターが2層に分かれているなど平面計画に若干の問題がある。デザインではエントランスホールがヒューマンスケールを超えて巨大になっていること、東側民家に圧迫感を与えることなどが指摘され、優秀作に届かなかった。

武井 誠 案

京都学センター、資料館、大学図書館などの主要な空間を一階にまとめ、その屋上をガーデン化し、周囲に豊かな緑の空間を与えている点は評価されたが、一方でアクセスの入り口が多く分散されて管理上の問題が生じること、文学部棟が五層構成となっていて大学運営上適切でないことなどが指摘され優秀作に届かなかった。

丸山 剛史 案

京都の町屋グリッドを空間構成のキーワードとしたことには共感を持たれたが、小路にあたるグリッド上にトップライトを取り、光を下まで通す工夫に無理がある。また上階の書庫に対する保存の問題、吹き抜けが火災時に煙突効果をつくるなど、書庫の防災上の難点に疑問が解消されなかった。意欲的な作品でありながら、優秀作に届かなかった。

(3) むすびに

今回の応募作品には書庫を地下におく案が圧倒的に多かった。資料館の収蔵品には国宝、重文あるいはそれに匹敵する貴重な資料がたくさんあり、賀茂川流域の地理的状况から、最優秀作を含め、水災害に対する保存の問題は資料館関係者の憂慮を完全に払拭したことにはなっていない。技術的に解決できるとする建築家とそこになお疑いを抱く資料館関係者との間の溝を埋めることは本設計に求められる重要な課題であることを特に付記したい。

7. 入選者（五十音順、敬称略）

第1次審査委員会において、106案から選出された概要設計提案19案の内、入賞5案を除く、14案の下記作品が入選として選定されました。

青木 淳	（あおき じゅん）	伊藤 恭行	（いとう やすゆき）
今村 雅樹	（いまむら まさき）	斉木 徹	（さいき とおる）
坂本 一成	（さかもと かずなり）	妹島 和世	（せじま かずよ）
田中 秀弥	（たなか ひでや）	千葉 学	（ちば まなぶ）
新関 謙一郎	（にいぜき けんいちろう）	古谷 誠章	（ふるや のぶあき）
松井 哲哉	（まつい てつや）	山本 圭介	（やまもと けいすけ）
吉松 秀樹	（よしまつ ひでき）	米田 明	（よねだ あきら）